

忘れちゃいけない(完全版)  
作：夏目彩香(二〇十五年三月十一日初公開)

忘れちゃいけない、あの日のこと。あの瞬間によって今の私がここにいるんだって……

三月十一日、体育館には日の丸が掲げられていた。派手やかな姿の母親たちがやって来ると、その会話が天井から降り注いで来るように思えた。奇しくもあの日にまた卒業式が行われようとしているのだ。二〇十一年三月十一日午後二時四十六分。あれから三年という時が過ぎようとしていた。僕の人生を全く新しいものに変えてしまったあの日のことは忘れちゃいなかった。

あの日も今日のように中学校で卒業式が行われた。式が終わると僕は母さんと一緒に家に帰った。二人でお昼ご飯を食べた後、妹が小学校から帰って来たかと思うとすぐに友だちの家に行くと言って出て行った。今まで体験したことが無いほどの揺れがあったのは、それから数分後の出来事だった。

揺れが発生する時にリビングにいた僕は、僕の頭の上から本でいっぱいになっていた本棚が、まるでモンスターのように襲って来たのに気づけなかった。本棚がぶつかってきた衝撃により意識を失った僕は、家の中で一時行方不明になってしまったのだ。

目線を日の丸から下の方へと移動させると、そこには校長先生が立って何かを語っていた。長い付き合いだったこの時間ともようやくお別れできるかと思うと、なんとなくすつきりとした気持ちになるが、ある意味さみしくも感じるのだった。話の内容はやっぱり三年前のことを思い出しながら話しているようだ。

三年前はこの学校で入学式があるはずだったが、震災後の影響で入学式を行うことはできなかったのだ。それだけではない、失ってしまった制服を準備することもできずに数ヶ月待たされた人もいるくらいだった。それよりも家の中で行方不明となっていた僕が意識を取り戻した時のことを鮮明に覚えている。

気がつく到校長先生の話が終わり卒業証書の授与式が始まっていた。順番的にはまだ先の方なので校長先生から一人ずつ渡して行く姿を眺めていた。男子は今となっては珍しい黒の詰襟タイプの制服に身を包んでいた。入学した頃には制服の方が大きかったものの、卒業式となると制服の方が小さすぎて腕が見える男子が多かった。女子はベージュのセーラー服、襟には細い二本線が描かれており、背中には右と左にイカリのマークが描かれている。スカートの色が学年によって分かれており、卒業生はロイヤルブルーだった。

そうこうしているうちに前に座っているクラスメートが立ち上がり、いよいよ僕もその子の後に続くように立ち上がっていた。たくさんの方がいるので、僕の姿も目立っているに違いないと思うと急に緊張して来た。担任の先生から名前を呼ばれると中央に立っている校長先生の前に出なくてはならないのだ。

「村瀬克彦(むらせかつひこ)！」

名前が呼ばれるのを待っているうちに三年前の記憶が蘇って来ていた。この時がまたやっていたとは、なんだか懐かしいこの瞬間を待っていた。

「村瀬……」

担任の先生が僕の苗字まで言いかけたかと思うやクシャミをして中断してしまった。

「エヘン……失礼しました。村瀬、村瀬彩音(あやね)！」

「はー！」

今の名前で呼ばれた僕は大きな声で返事をする、校長先生の前に立ち卒業証書を丁寧に受け取った。受け取る時に校長先生は小声で「長かったよね。卒業おめでとう」と言われた。自分の席に戻りプリーツスカートを手で広げてから座っていた。こんな風に座るのも実はすっかり慣れてしまっていたのだ。

震災の後に僕が意識を取り戻したのは、意識を失ってからそれほど長い時間が経っていなかった。いや、僕は本棚の下敷きになった瞬間に死を覚悟していたが、思ったよりも早くに意識が戻って来たのだ。しかし、意識がはつきりとして来た時は水の中にいて身動きが取れない状態になっていた。そう、津波の中に飲み込まれたのだ。水の中で自由に身動きすることはできなかったものの、なんとか掴まる物を見つけて水面に頭を突き出し、ようやく息を吸うことができるようになったのだ。生きるのに必死になっていたのだ。

本当は陸地なはずの場所は辺り一面を水で埋め尽くされていた。その光景を目の当たりにしながら、顔に何かがまとわりついて

いることに気づいた。自由になっている片手を水の上に持って来て、顔のラインをなぞってみると長い髪が顔にくっついてたのだ。しばらく意識をなくしてから水の中にいるため身体感覚がまだ完全に戻って来ないものの、明らかに何かがおかしかった。自分の手を見てみると僕の手は手のひらが小さく指は長細く変わっていたのだ。小高い丘がある辺りまで流されると水の中からようやく出て来ることができたが、その時になって僕に大きな異変が起きたことがわかったのだ。

陸地の上の上陸すると身につけているものが、水分を含んで体にまとわりついて来た。自分の体を見回してみるとそれは自分の服では無かった。この服を見た瞬間、何が起こったのかを今更理解することができたのだ。この服は僕の妹の彩音の物だった。長い髪は僕の頭から伸びており、背も低くなっていた。津波に巻き込まれた影響で裸足で靴は脱げてしまっていた。地震が発生した直後に本棚が倒れて意識を失った瞬間に、妹の彩音のことが心配だった。どこへ行ってしまったのだろう、地震の被害に遭っていないだろうか意識を失いつつ思っていたのだ。どうやら、僕は自分の肉体から妹の肉体に意識を飛ばされてしまったようだ。なんとか陸地に辿りついたものの、自分の妹の姿となってしまっていたのだ。

昔の記憶から解放されると、いまだに続いている卒業式の光景が戻って来た。出席している卒業生のすべてに卒業証書が受け渡されていた。僕ももらった卒業証書を広げて目を落としてみる。するとそこには村瀬克彦では無く、村瀬彩音という文字が書かれていた。まさか妹の名前で書かれた卒業証書を受け取ることになるとは思ってもいなかった。実は村瀬克彦としては中学校の卒業証書を受けとった日が人生の最後の日となったのだ。そして、その日は村瀬彩音として人生を引き継いだ最初の日でもあった。村瀬克彦の遺体は震災から三日後の三月十四日に見つかったのだ。避難場所で自分の遺体と対面することになるは思いもしなかったし、妹として自分に対面しなくてはならなかったのだ。さらに辛かった。僕の家族は同じ日に父さんも亡くしてしまったので、母さんと妹になってしまった僕の二人だけがこの地に残されたのだ。

そんな母さんもこの卒業式に出席していた。稼ぎ頭だった父さんが亡くなったため震災後から仕事を始めたが、母さんは意外にも父さんが勤めていた会社にスカウトされて入社したため、生活に不自由することは無かった。卒業式のためにできるだけ派手やかな服装にしたいとは言っていたものの、最愛の人と最愛の息子の命日でもあるということで、シンプルな黒のワンピースに身を包み、左胸に父さんからプレゼントされたというブローチを付けていた。母さんが座っている席とは少し離れているものの、母さんの化粧の匂いが漂って来ることを感じていた。

卒業式が終わると最後のホームルームの時間となった。担任の先生とも妹のクラスメートともお別れで、これから僕は女子高に進んで女として磨きをかけることにしていた。母さんと一緒に校門で記念撮影をしてから二人で自宅までの道を歩いていた。いつも仕事に出てしまうので平日の昼間にこうやって並んで歩くのは久しぶりのことに思えた。

「彩音ちゃん、卒業おめでとう」

距離を置けばただの母と娘の会話に見えるだろうが、実際には複雑な関係と言った方がいだろう。死んだはずの兄が妹として生きているのだから無理もない。今となつては三年前にあつた出来事は不幸なこととは思っていなかった。妹の命をこうやって引き継いだこと、それだけでも感謝すべきことだと思つたのだ。母さんも思春期が始まったばかりの頃に衝撃的な出来事が起こつたので、妹の変化をあまり感じなかったのだろう。僕も妹として中学校に入学したので、小学校の頃に一番親しかった友だちを除いては僕のことを怪しく思う人はいなかった。

「ありがとう。お母さん」

母さんの暖かい手を握りながらそう言うと、僕の目から一筋の涙がこぼれていた。さりげなく手で拭き取したが、母さんはその涙に気づいたらしい。

「ねえ、もしかして克彦のことを思い出したのかしら？今日はあの子の命日だから無理もないけどね」

そう言われた僕は自然なタイミングで次の一言が口から出ていた。

「お母さんは寂しくないの？」

客観的に考えてみると僕に起きた出来事は全てが悲劇と言えるものだ。しかし、僕の中ではそのような感情は起こらなかった。目の前に起きた出来事と自分の身に起こった出来事をそのまま受け入れること、それが僕にとつての最善の策だったからだ。もちろん、男性として十五年以上の時間を過ごしたので、女性として振る舞うにはまだまだ時間が必要だった。妹の体に僕の意識が入ってしまったものの妹独自の記憶を引き出すことはできなかった。ただ、日常の生活に必要な基本的なことは体が覚えていたのか、自然にこなすことができたのだ。考えてみると母さんも同じ境遇だった。愛する人を失ったことによるショックは母さんの方がもっと大きいはず、そう思つた瞬間に出て来たのがさっきの一言だった。黒いハイヒールが地面を蹴る音が止んだかと思うと、その場に立ち止まり僕にしっかりと向き合った。

「彩音ちゃん。母さんが寂しくないって言ったら、それは嘘になるわよ。でもね、寂しくなつたからって父さんも克彦も戻ってくるわけでは無いの、私たちは現実に向き合つて行かなければならないじゃない、いつまでも寂しいだけでいたら残された私たちがここで生きて行けなくなるわよ」

震災直後、母さんと一緒にたくさん話をして来たように思うが、こんな風に話するのは初めてのことだと思う。きっと母さんの中でも様々な考えや葛藤があったに違いないのだ。

妹の彩音のびしょ濡れの体で、なんとか自宅のあった場所まで行ってみたのだが、自宅付近には津波が襲って来てはいなかった。建物は地震の被害を免れたものの、家財道具が乱雑に積み重ねられていた様子を今でも鮮明に覚えている。そして、家の前には途方に暮れていた母さんの姿があった。母さんは地震が発生した時には家の外に出ていたので無事だったが、家の中では僕が被害にあっていたのだ。家財道具を取り除けようにも自分の力ではどうすることもできなかったため、家の外にずっといたと言うが、ぐちゃぐちゃになった家の中から最低限のものを集めて避難場所へ移動するしかなかった。この時になってびしょ濡れになった服を着替えたのだが、妹の部屋にあるクローゼットから着替えを取り出したのだ。リビングにいるはずの自分の体を救出することができずに、僕は母さんと一緒に避難場所へと駆け込んだ。

「彩音ちゃん、無事だったのね」

避難場所へ行くと妹の親友である川崎沙織(かわさきさおり)が飛びついて来た。本当は学校が終わってからまた会う約束をしていたのだが、一緒に遊んでいる時に津波に襲われたと言うのだ。津波に襲われながらお兄ちゃんの名前を叫んでいたと言うが、津波の中に飛び込むこともできなかったので心配していたと言った。妹の友だちとして沙織のことは知っていたが、彩音とは知っていない程度が違い過ぎる。この時は沙織と一緒に避難生活が続けるのが非常に大変なことだと思っていたのだが、後で考えてみればこの時間によって僕は沙織から彩音のことをたくさん教えてもらったのだ。三年が過ぎた今では僕らはさらに仲が良くなっていた。来月からは沙織と一緒に同じ制服を着ることも決まっていた。これからも大親友として二人の関係が続いて行くと思う。彩音から引き継いだ大切な宝物だけに、いつも沙織の真似ばかりしていたように思う。

母さんのハイヒールの音が再びコソコソと鳴り始めていた。僕もその足音に揃えるように一緒に歩み始めていた。母さんの短い一言を聞き一緒に歩きながら僕はあの日の出来事を考えていた。途方に暮れていた母さんの姿は忘れられない、今はとても優しく力強い父親のような側面も持っているが、震災が発生するまではこんなに優しく接してくれなかった。会社で仕事をしていた父さんは家にいることが少なかったが、家にいる時はとても優しく接してくれた。子育てのために時間を割くことができないので、僕らにいつも悪いって言ってたくらいだ。震災を経て母子家庭となった僕らの家庭を支えるため母さんは父親としての側面も持つようになったから、父親のような面が出て来たのかも知れない。家に帰ったら母さんと久しぶりに二人きりの時間を過ごせそうだ。そんなことを思いながら僕はまた村瀬彩音としての新しい一歩を踏み出していた。

自宅に戻ると母さんは黒い余所行きのワンピースから、会社に行く時にたまに着ているツーピースを身にまとっていた。どうやらこれから出勤するようだ。母さんとゆっくりした時間ができると思ったのも、会社の大事なキーパーソンとして一気に取締役役まで抜擢されてしまったのだから無理もない。母さんが二十歳の時に僕が、二十三歳の時に彩音が生まれたからまだ三十代だった。三年もしないうちのスピード出世にびっくりだが、家にいると色々なことを思い出してしまうと言って、僕がこの家を一人で守って来たようなものだった。卒業式の今日くらいは一日中ゆっくりとして欲しかったのに、出かける準備のため化粧を直していた。

「お母さん、これから会社に行くの?」

そんな母さんに僕は声をかけてみた。僕はまだ制服姿のままだった。この制服はこれから着ることは無くなるからまだ着ていたかと思っていた。そんな僕に母さんが化粧台の鏡を通して僕を見ながら口を開いた。

「今日は会社に出社しなくてもいい日よ。でも、あの人と克彦の命日じゃない母さんにとっては愛する二人を失った日よね。このツーピースはあの人からの贈り物なのよ。これに身を包んで会社に行く時と同じメイクで過ごしたいの」

そう言いながら母さんは一筋の涙を見せていた。

「お母さん、泣くとせつかくのメイクが崩れちゃっよ」

「あら、そうよね。でも、なんか今の私は泣きたい気分なの」

「どうして?」

「それは今すぐは言えないわ。彩音ちゃん。母さんを一人にしてくれないかしら?」

「わかった」

「今晚は彩音ちゃんの食べたいものを食べに行こうと思うから、夕方まで自由にしていいいわよ」

母さんの部屋から自分の部屋に戻ると、ベッドの上に座り印象的なさっきの母さんの涙のことを考えていた。あれは、震災発生後に自宅の前で再会した時に見た涙と重なって見えたからだ。きつと、母さんにとってはわすれられないこの日、自分の娘にも話すことのできないことがいっぱいあるのだろう。僕は自分の部屋に飾ってある家族四人で写っている写真を手に取って眺めていた。そこには父さんと母さんと一緒に克彦と彩音の姿が写っていた。そして、その隣にある母さんと彩音が二人きりと写っている写真に目をやった。こっちは震災が起こつてからの写真だった。この時の彩音の表情は隣にある克彦の表情と全く同じだった。

た。克彦としての人生が彩音としての人生に引き継いでいる僕だけが知っている証拠写真だった。母さんにもきつと僕にも言うことのできない秘密があるに違いないと思った。

いつの間にか制服姿のままベッドの上に倒れるかのように僕は眠っていた。スマホの着信音で目を覚ますとさっそく画面をチエックした。沙織からのメッセージが入っていたので、すぐに開いてみるとさっき校門の前で一緒に撮った写真が送られて来た。まだゆっくりと時間は取れないけどとりあえず写真を送ってくれたようだ。沙織も今日は家族と一緒に過ごしているはず。いつもだとたくさんのメッセージをやり取りしているが、沙織の方が圧倒的送ってくる数が多かった。彩音として中学校に入学した時に携帯を持つようになったが、最近になってスマホに変えることができた。僕の持っているスマホはもちろん背中中にリンゴマークのついていた。時間を確認すると母さんと一緒に食事に行く時間が近づいていた。僕は制服からお気に入りの水色のワンピースに着替え、自分の部屋を出てリビングで母さんを待つことにした。

母さんが自分の部屋で籠りつきりになるのは珍しいことだった。一人になるにしてもリビングでゆったりと過ごすのが好きなのに、やっぱりこの日になると色々と思いついてしまうことがあるのかも知れないと思った。僕はリビングのソファに座りながら一人で母さんがやって来るのを待っていた。そして、シヨルターバッグからスマホを取り出して沙織から送ってもらった写真を眺めていたのだ。校門に立てかけられている卒業式の看板の前には制服姿で彩音と沙織が笑顔で立っていた。この彩音こそ僕の今の姿なのだが、この笑顔を作れるようになるまで三年もの月日を要したのだ。来月入学する予定の高校では、すでに買ったあるブレザーに身を包むことになるのだ、すっかり慣れたセーラー服もお別れしてしまうのはなんだか寂しくもあった。やっぱり僕の根は男がまだ残っているのだ。セーラー服に対する憧れが強かったものの、自分がそのセーラー服まで袖を通してしまつとは思ってもよらなかった。

避難所から自宅に戻ったのは震災が発生してから一ヶ月後のことだった。中学校の入学式は二週間遅くなったものの、彩音が試着して買った制服もなんとか無事だったので制服で入学式に臨むことができたものの、クラスメートの中には制服が準備できず私服姿で来る人たちも何人かいたのだ。入学式の時も今日のように母さんは出席したものの、式が終わるとすぐに仕事に出かけてしまった。父さんを失ってすぐに仕事ができるようになったのにはありがたかったが、これほどまで早くに動きに出るとは思ってもいなかった。だからこそ、今日は一緒に食事をするだけで嬉しかった。そして、いつの間にか母さんは自分の願う理想の女性と思うようになっていた。大人になったら母さんのようにキャリアウーマンとして活躍してみたいと思うようになって来たのだ。そのために女性としての磨きをかけたいと思って、沙織と同じ女子高に入学することを決めたのだ。これからは寮生活となり故郷を離れることになる。母さんともお別れしなくてはならないが、どっちみちいつまでもそばにいるわけでも無いのでちょうど良かった。東京の女子高に進学することになっているのだ。沙織と一緒にわざわざ規律の厳しい学校を選び、一緒に通うことができるようになった。寮生活では二人部屋となることも決まっていた。

リビングのドアが開くとさっきと同じワンピースに身を包んだ母さんが現れた。窓の外はすっかりと暗くなっている。僕のお腹が鳴るとさっきまでの神秘的な顔とは違い母さんは笑顔を見せてくれた。

「彩音。そろそろ行きましようね!」

玄関に向かうと真ん中に目新しいヒールのある水色のパンプスが置かれていた。

「お母さん?これって?」

「母さんから彩音にプレゼントよ。この前、あなたと一緒にお店の前を通った時にステキだって教えてくれたじゃない。あなたにぴったりな大きさがあつたので買って置いたのよ!」

母さんはまだまだ三十年代、僕と一緒に並んでいても母親とは見られないくらいに若いのに、仕事にはかり夢中で自分のことを考えてくれないと思っていた。だからこそ、その母さんから自分のために靴を買ってもらったことがとても嬉しかった。ゆっくとまずは自分の左足をパンプスの中に入れてみた。

「あつ。本当にぴったりな大きさ」

続いて右足もパンプスの中に入り込むと、そこにはいつもとは違う視界が広がっていた。つま先が低くて踵が高いのでなんだか少しだけ背伸びをしている感じ、玄関にある姿見を見ると、そのパンプスはまるでワンピースと揃えたかのように同じ色だった。彩音の好きな色が水色だった。僕もピンクよりは水色の方が抵抗なく受け入れることができたので、彩音になってからは身につけるものは比較的水色が多かった。

「やっぱり、彩音ちゃんが一番かわいいわね」

母さんはお世辞ではなく本心からその言葉を言ってくれた。僕にとってはその褒め言葉こそが何よりもプレゼントだった。克彦として中学を卒業した時にも母さんは何かプレゼントを用意してくれたのだろうか?今となっては何もわからない、震災発生の瞬間、自宅にいた僕は重たい本棚の下敷きとなってしまい、母さんは外にいて助かったのだ。会社へ移動中だった父さんは津波に飲み込まれてしまい帰らぬ人となっていた。

みんな、これまで生きるのに精一杯だったんだと思う、人はそれぞれの思いを持って今日も生きてるのだ。僕の家族がこの地上に残されたのは母さんと僕の二人だけだった。さらに、僕は妹の彩音としての人生を自然と引き継ぐことになってしまった。妹を助けたいという思いと、お兄ちゃんを呼び求めた妹の思いが重なった時に、意識が抜けてしまった妹の体に僕の意識が入って、妹の肉体を助けることができたのだ。きつと、あの出来事が無ければ母さん一人だけがこの地に残されたことだろう。そんなことを思うと彩音としての残りの人生は大切なプレゼントのように思う。

「彩音ちゃん。何が食べたいかしら?」

姿見の前で自分の姿にみとれているうちにいつの間にか、別のことを考えてしまっていた。気がつくとも母さんは今まで見たことのない高さのピンヒールをシューズクローゼットから取り出して来た。艶のある赤いピンヒールの上に乗った母さんは年齢よりもずっと若く見えた。二人で揃って姿見を覗いてみると、ちよっと年の離れたお姉ちゃんと言った方がいくらいだった。

「今日のお母さん、一段と若々しくなったね。今日だけお姉ちゃんって呼んでいいかな?」

思わずそんなことを口走ってしまった。いつもは彩音だったらどう言うんだろうと考えてから言葉を出すものの、この時は自然とそんな言葉が出て来た。

「いいわよー」

間髪入れることなく母さんはすぐに返事を切り返してくれた。母さんとの久しぶりのデートは一体どんなことになるのだろう。そんなことを考えながら、僕は新しく買ってもらったパンプスで地面を叩くように歩き出していた。

どこに行こうか少し迷いつつも、自宅から車で二十分ほどのところにあるいつものお寿司屋さんで食事をすることに落ち着いた。実はこの店の主人が父さんの親友だったという事もあり、特別な日になるといつもここに来ていたのだ。家族が減ってから特別な日毎にここにやって来ていたのだ。職人さんの中には僕ら兄妹のことをよく知っている人がいるため、まるで家にいるような雰囲気でも過ごせるのが良かった。しかし、母さんは今日はさっと予約を入れて、普段は入ったことのないプライベートカウンターに通された。

プライベートカウンターとは大きなカウンターのある個室のことで、部屋も職人さんも貸し切りでお寿司を堪能することができるのだ。カウンターには三代中盤でまだ独身の職人さんが立っていた。背が高く顔立ちもいいのに恋人はいないとのこと、僕は密かに母さんと一緒になってくれたらお似合いなのだと思うていた。お互いに好意を持っているものの、それを表現できないような雰囲気を感じていたのだ。

「いらっしやいませ、村瀬様。本日担当させて頂きます浅田義朝(あさだよしとも)です。お召し上がりしたいものがあれば、なんなりとお申し付けくださいませ」

プライベートな空間のため声を張り上げるよりも、丁寧な言葉遣いが要求されるらしく、浅田さんの雰囲気はいつもと違っていた。加えて、どうやら母さんの姿を直視することができないでいるようだ。三人だけだと、この空間は思った以上に大きく感じるのだ。なんとなく場の雰囲気が悪くなったところで、個室の扉をノックして女将さんがお茶とお絞りを持って入って来た。

「村瀬さん、いつもありがとうございます。あら、今日の彩音ちゃんはなんだかきれいな。もしかして、彩音ちゃんも卒業式だったのかしら?」

女将さんはお茶をテキパキと差し出しながら、母さんと僕に挨拶してくれた。彩音にとっては生まれた頃からの付き合いなので、なんでもよく知っているのだ。もちろん今日が卒業式だって情報は当たり前知っているし、そのためにこの個室を使ってもらうことができるように、他の予約は極力入れないように配慮してくれたそうだ。こんな細やかなサービスと家族ぐるみの付き合いをしていたからこそ、また来てみたいと思うようになるのだ。母さんと僕は女将さんと簡単に話を済ませると気分がリラックスして、個室の雰囲気に一気に溶け込むことができた。

浅田さんの握るお寿司はとにかく美味しかった。シャリとネタの絶妙なバランスに加えて、さらに女性が好む味付けにほんの少し変えているとのことだった。さらに、彩音はお寿司が大好きだったので、それも影響しているようだ。食事が進むに連れて、浅田さんとも会話を楽しむことができるようになって来た。お腹がだいぶ膨れて来た頃、母さんに浅田さんがノンアルコールの赤ワインと共に一本の赤いバラを差し出した。震災をきっかけに母さんはアルコールを止めてしまったので、以前のようにワインは飲まなくなっていた。そもそも車でやって来たのでアルコールを飲むことはできなかった。しかし、これらの物を見た時に母さんの赤いピンヒールを思い出した。まるでお互いに約束していたかのように思えた。

「彩音ちゃん。浅田さんのことどう思う?」

ワイングラスを手に母さんは意味有り気な言葉を僕に投げかけた。

「浅田さんって、素敵な職人さんだと思うわ。ちょっと年の離れたお兄ちゃんって感じかな…あつ、まさか…やっぱり…そんなわけないよね…なんだか今日のお母さんってちょっと変な感じ」

そう言いながら僕は二人の間に何かがあることに薄々感じ取っていた。あの日から三年が過ぎ、娘の彩音が中学校を卒業して、これから東京の全寮制高校へ行くことになっている。母さんからしたらこんな絶妙なタイミングは他にはないのかも知れない。大人には大人の事情というのがつきまとうらしいが、僕の予想はかなりいい線を行っているはずだ。母さんはバッグの中から化粧ポーチを取り出し化粧を直してくるとその場からいなくなった。僕を浅田さんと二人きりにするためにわざといなかったのかも知れない。

「彩音ちゃん。さっき、お母さんから変な質問されたよね…」

母さんがいなくなってから浅田さんはそんな風に切り出して来た。そしてその言葉からしばらく間を空けて、浅田さんが再び口を開いた。

「…彩音ちゃん。実は、以前彩音ちゃんのお母さんにプロポーズしていたんだ。お母さんからは、お父さんの命日にその返事をくれるってことになっていったんだ」

その言葉を聞いた瞬間、僕の心の中から何か熱いものがこみ上げてくるのがわかった。そして、それは自然と涙腺を潤し大粒の涙となって落ちていた。

「浅田さんとお母さんが一緒になったらいいって、心の中でずっと思っていたんです。浅田さんだったら私も安心できます。お母さんが浅田さんのことを受け入れるんだったら、私が反対する理由は全く無いです」

僕は大粒の涙を新しく渡されたお絞りで拭いながら、心を落ち着けて浅田さんに思いを伝えた。その瞬間、浅田さんは肩に載っていた得体の知れないものが無くなったかのように気分を昂揚させて言った。

「ありがとう、彩音ちゃん。お店に入ってきた時にお母さんからすでに返事はもらっていたんだよ。プロポーズした時にお母さんから言われていたんだけど、プロポーズを承諾する時には赤いピンヒール、拒否する時には黒いローパンプスで来店しますって約束していたんだよ」

その言葉を聞いたとき母さんが一人でいたいと言った理由をすぐに理解した。浅田さんとのプロポーズを受け入れたらいいのか、それを決めようとしていたんだ。それならお父さんからもらったツイース姿やメイクにも何か意味があるはず。そんなことを思い始めた時に化粧室から母さんが戻って来た。メイクを直しただけでなく髪を上げて来た母さんの心のうちを僕は知りたと思うようになっていた。

「彩音ちゃん。浅田さんから大事なことを聞いたわよね」

母さんもうやら何か重荷が無くなったようだった。さっきまでとは違って軽やかな言葉遣いに変わっていた。

「お母さん、浅田さんからプロポーズされていたんだなんて、どうして私には黙っていたの？それに二人が交際していたなんて初耳だし」

カウンターの横に座り直している母さんに向かって僕はちよつとだけ愚痴をこぼしてしまった。

「だって、あの日から三年が経って彩音ちゃんが卒業するまでは私たちが交際していることも黙っておきましょうって約束していたの。そもそも私が仕事で忙しいからデートなんてなかなかできるわけでもないし、こうやってお店に来てはこっそりと連絡をするしか無かったのよ。今日、この個室を貸し切ったのは、新しい家族として一つの空間で過ごしてみたかったからなのよ」

浅田さんと母さんがこっそりと付き合っていたというのは意外なことだった。確かにいい雰囲気ではあったものの、付き合っているようには見えなかった。ここに来るたびにお互いに軽く挨拶する程度だと思っていたものの、二人は二人にしかわからない何かを決めていたらしい。

「ねえ、お母さん。浅田さんがお父さんになるってことは、私の名前が村瀬から浅田になるんじゃないの？でも、浅田さんって母さんよりも年下なのよね」

カウンター越しに見つめ合う二人は、すでにカップルの領域を超えて夫婦のような雰囲気を感じ出し始めていた。母さんに投げかけた質問は浅田さんが代わりに答えてくれた。

「彩音ちゃん。名字については大事なことから三人でしっかりと決めたいと思っています。彩音ちゃんは十五歳、彩音ちゃんのお母さんは三十八歳だよ。僕は彩音ちゃんが指摘した通り彩音ちゃんのお母さんよりも三歳年下の三十五歳だよ。僕が二十歳の時に生まれたのが彩音ちゃんということになるから、やっぱりお兄さんというよりはお父さんだと思う」

プロポーズの結果待ちとは言っても、すでに二人はもうだいぶ先のことまで考えているようだった。確かに二十代のカップルと

は違って結婚を前提に付き合っていたというのは間違いないことだろう。浅田さんが話してくれたようにこれからの新しい家族については僕も意見を出すことができるのだ。名字が変わるのは確かに不便なことだが、夫婦別姓がまだ認められていないこの国では、どちらか一方の姓に統一しなくてはならないのだ。

「やっぱりお母さんよりも三歳年下なんですよ。浅田さんがこれから新しいお父さんになることに関しては私は反対する余地はありません。私はお母さんのことを応援する立場、3人の間に子どもができてくれるのも構いません。村瀬という名字にやっぱり愛着がありますけど、ちょうど高校に入学するタイミングで浅田に変えるのも私としてはいいと思います。東京に出て行くタイミングで村瀬彩音が浅田彩音に自然に変えるのって、そんなに抵抗無いかと思っています」

浅田さんと母さんが結婚する。それは、二人がお似合いだと思っていた段階とは違って現実的には色々と考えていっばいだった。娘が中学校を卒業するまで二人とも黙っていたのにはやっぱりそれなりの訳があるのだろう。

「彩音ちゃん、ありがとう。君からも承諾をもらったならまずは入籍だけでも早く済ませたいと思う。名字については二人で一緒に考えていたんだけど、どうやら彩音ちゃんも同じ考えのようだから、お母さんと彩音ちゃんの名字は村瀬から浅田に変わることになるよ。名前が変わることによる手続きが色々必要になるだろうけど、高校に入学するまでにはなんとか終わらせるようにするよ」

どうやら二人も同じ考えのようだった。父さんから引き継いだ村瀬という姓が無くなるのは寂しくなるものの、いつまでも村瀬という姓に縛られたくなかった。これからは浅田彩音として新しく生まれ変わるのだ。浅田彩音として女子力に磨きをかけてもっと女性としての人生を楽しもうと思っていた。まだ残っている男としてのプライドは金繰り捨ててしまおう。そう決心した瞬間でもある。僕……いや、私のこれからの人生は浅田彩音として完全に新しくなるのだ。

「お母さん。二人が入籍すると私は浅田彩音ということになるのよね。お母さんは村瀬香織(かおり)から浅田香織(かおり)になるのよね」

私はカウンターの横に座っている母さんに向かい、そう言いながらまるで自分に自己暗示をかけるかのように言っていた。

「仕事上の名前は今まで通り村瀬香織を使えばいいから、母さんとしてはそんなに問題が無いのよ。村瀬というのはもともとあの人の名字で、結婚する前は木村香織だったから、母さんにとっては三つ目の名字になるわ。それよりも、彩音の高校に再婚したことによる名字変更を連絡したりそっちの方が面倒そうよ。彩音ちゃん自身で必要な手続きは特に無いからそのあたりは心配しなくていいわよ」

カウンター越しに立っている浅田さんは調理場の中を片付けながら話しかけて来た。

「ねえ、彩音ちゃん。これからは彩音ちゃんのお父さんになるんだから、彩音ちゃんの前でお母さんのことは香織、彩音ちゃんのこととは彩音って呼んでいいかな?」

「いいわよ。お父さん!」

私がそう言うのと個室の中は三人の笑い声でいっぱい包まれた。

パーン!パーン!パーン!

明るい雰囲気包まれた個室の扉が開くと、女将さんと父さんの親友であるご主人がクラッカーを鳴らしながら入って来た。

「浅田さん、村瀬さん。この度はおめでとー!二人が織りなす新しい家庭に祝福がありますように!そして彩音ちゃんのことからについても祈ります」

女将さんとご主人が個室にやって来ると、浅田さんも調理場から出て来て同じ場所にみんなが集まった。

「女将さんたちも二人のことを知っていたんですか?」

疑問に思った私は女将さんに聞いてみた。

「私たちもさっき知ったばかりなのよ。香織さん……彩音ちゃんのお母さんが化粧室に行ったその後で伝えてくれたの。浅田さんっていい人だから早く落ち着いてもらいたかったって私たちはお見合い相手を探していたんだけど、彼っただけで話を断っていたのね。香織さんよくお店に来ていたし、二人ってなんとなく仲がいいとは思っていたんだけど、まさか結婚まで話が進んでいたなんてことは思いもよらなかったわ」

女将さんもご主人にどうやら黙っていたようだが、二人が入籍を決めたことによって簡単なお祝いをしたとさっそく準備したようだった。

「村瀬の奴が香織さんを初めてこの店に連れて来た時のことを思い出すよ。あの時も同じような赤いピンヒールで店にやって来て、若い女性と結婚した村瀬の奴がとっても羨ましかったんだよ。今でもこうして家族ぐるみの付き合いをさせてもらっている

が、この店の若きエースの浅田くんが奴の後を引き継ぐように香織さんと再婚することになるなんて、なんだか俺にとっては感概無量なことなんだよ。今日は奴が三年前に死んだ日だけど、たった今から祝福の日が変わったようだ」

父さんの親友だったご主人だが、仕事のせいもあってか父さんと同じ年齢にしてはずいぶんと貫禄を持っていた。親友の妻だった母さんが浅田さんと再婚することについて、なんのわだかまりも持っていないことは幸いなことだった。

「浅田さん、これからも店を頼みますよ。私たち夫婦の間には子どもを授けられなかったから、このお店の将来は浅田さんたちにかかっていると思ってるのよ」

「女将さん、ありがとうございます。これからは家族共々よろしくお願いいたします。お互いの両親には二人の間で結婚する意思があれば入籍しているという確約をすでに取り付けておりますので、ホワイトデーにでも入籍の手続きをしようと考えているところです」

「彩音の入学があつたりと忙しい時期なので、落ち着いてから結婚式を挙げることにしたいんです。プロポーズ受ける前から二人で色々話をしたのですが、私にとっては二度目の結婚式になりますし挙げなくてもいいって思っていたんですけど、浅田さんは初婚なわけだし子連れでもしっかり式を挙げたいと思ってます」

「まあ、とにかく良かった良かった。浅田くんはこの辺で上がっていいよ。今から香織さんたちとゆつくりと時間を過ごすとい。彩音ちゃんにもきちんとな得してもらわないと今後大変だろうしね……」

そこまでご主人が言うと、浅田さんに向けていた視線を母さんの方に向けて言葉を続けた。

「あつ、それと香織さん。本日のお代はいりませんよ。この席は私たちからのお祝いと思って受け取ってください。香織さんは私にとっては親友の大切な人だ。まさか浅田と新しく結ばれるとは思ってはいなかったけど、あいつのことだからこの再婚を喜んでくれるはずだよ」

浅田さんは帰り支度をすると言って準備を始めていた。

「大将。香織さんが大将の親友である村瀬さんの妻だったということは僕にとつてどうってこと無い問題でした。むしろ、亡くなった村瀬さんのことを考えるとこんな早くに再婚に踏み切っているのか迷ったくらいです。大将がそう言うのでしたら村瀬さんはむしろ喜んでるのかも知れませんがね。これからは香織さんと彩音ちゃんと三人で一緒にあたらしい家族を築き上げていきたいと思えます。今後ともよろしく願います」

浅田さんはそう言ってご主人に深々とお辞儀をすると、店の奥の休憩スペースに着替えをしに行った。

母さんと一緒にあるマンションの駐車場に辿り着いた。私の住むのは人口が十万人にもみたくない小さな都市だが、ここでもマンション開発は進められているのだ。

そう、ここは浅田さんが住むマンションだった。母さんがオートロックの部屋番号を押すと浅田さんがすぐに解除した。マンションの外と中を隔てている扉が開くや、母さんは迷うことなくエレベーターがあると思われる方向に向かっていった。東京あたりでは当たり前だろうけど、このあたりの街にしてはずいぶんとグレードの高いマンションに思えた。

母さんと一緒に四〇一と書かれている扉の前までやって来た。とは言ってもエレベーターから降りると右と左に一軒ずつしか無いので、エレベーターから降りてすぐの場所だ。四階がこのマンションにとつての最上階なので、どうやらこのマンションで一番高額な物件だと言うことは私でもすぐに理解することができた。玄関の扉が開くと男性が一人で住んでいるとは思えないくらい広々とした玄関が現れた。玄関の横にはシューズクロークが備え付けられているもの、電子機器や電子製品のダンボールが積み重ねられており、靴置き場というよりもまるで物置のように使われていた。

リビングへと通じる長い廊下には浅田さんが所有しているCDやDVDがズラリと並べられていた。この道を通り抜けるとリビングが現れたが、そこはホームシアターそのものだった。浅田さんに母さんがコートとバッグ預けると、部屋の隅にあるコート掛けにかけ、バッグもどうやらいつもの場所と思われるサイドテーブルの上に置いてくれた。もちろん私のコートも母さんのコートと一緒にぶら下がっていた。

母さんと一緒に大きなテレビの向かい側に置かれてある大きなソファに腰を降ろすと、ローテーブルの上に浅田さんのタブレットが置かれているのが気がついた。自分の持っているスマートフォンとお揃いの端末は、前々から自分で使ってみたいと思っていたもので、手に取ってみたくなった私は浅田さんに聞いてみた。

「これ触ってみてもいいですか？」

初めての部屋に入っていくなり口に出す一言としてはどうかと思うものの、これから新しいお父さんになる人なのでこのくらいの一言は平気だと思った。

「あつ、それなら勝手に使っちゃいいよ。パスワードは彩音ちゃんのお母さんの誕生日で八桁だから」



浅田さんはそう言ってすぐに返事をしてくれた。他人なら勝手に触れないものでも、そうやって応えてくれるところに新しい家族ができたことを感じ、嬉しくなった。タブレットのカバーを開くと、いつも自分が見ている画面よりもずっと大きな画面が現れた。まずは写真という名前のアプリを起動してみることにした。写真アルバムは完全にプライベートなものだが、浅田さんはむしろ自由に中を覗いていいよという感じだった。スマホで撮った写真がすぐに転送されて、タブレットの大きな画面で見ることができるのは新鮮な体験だった。スマホで撮影した写真の中は浅田さんの日常が反映されているだけだった。ここにはお母さんとの写真は一枚も出て来ない。

「この中にはお母さんとの写真は無いんですか？」

我慢できなくなってしまうので思わず浅田さんに不満を漏らしてしまった。すると浅田さんは僕のそばに寄り添うようにソファに座って、タブレットを自由自在に操り始めた。すると写真アプリでは無く、何か別のアプリを起動させていた。それはソーシャルネットワークのアプリだった。浅田さんはそこにたくさんのアルバムを作成していて、お母さんと一緒に写真を格納していたのだ。

「彩音ちゃんのお母さんの写真を入れているアルバムは、僕とお母さんしか見ることができないように設定しているから、ここを使ってプライベートでアットした写真をやり取りしているんだよ。今まではずっと周りに知られるとまずいと思っていただけからね。でも、入籍すれば正式に夫婦となるわけだから、これからは友だちには公開することができるよ」

二人が付き合っていることは徹底して隠して来たようだ。しかし、二人が付き合ってきた記憶は二人のタイムラインに残されているのだ。女子として中学校生活をなんとか過ごして来た私は、なんだか自分が妹の彩音として定着することに一生懸命で、母さんのことを気にしていなかったのかも知れない。浅田さんに私のアカウントを教えると、さっそく友だち申請をしてくれた。すぐにスマホに通知が届いたので、こちらもすぐに友だち承諾をしていた。母さんは仕事で忙しい割にこまめにアップデートしていたが、私はメッセージングを行う別のアプリに夢中になっていた。ほとんど読む専用と化していたものの、浅田さんと繋がったことよって、これからはもう少し起動する頻度があがりそうだった。久しぶりに起動してみると浅田さんの投稿がタイムラインにたくさん流れて来ていた。

そこには母さんと一緒に写真も時々見えるのだ。

「彩音ちゃん。今までずっと黙っていてごめんさいね」

ソファの片隅に座っている母さんがなんとなく神妙そうな顔をして私に話して来た。

「大丈夫。私はお母さんのことを応援しているんだからね。浅田さんと一緒になったらお似合いだっと思っていただけだし」

「この子ったら、何か誤解しているわね。浅田さんと結婚することは父さんが亡くなってからほぼ決まっていたことなのよ。浅田さんが私のことを本当に理解してくれたからこそ、プロポーズしてくれたんだし、私もそれに応えることができたってわけなのよ。母さんが赤いピンヒールを履く自信は持っていなかったんだけど、父さんからその力をもらったのよ。だってね……」

母さんが途中で言いかけると、浅田さんが話を中断させるように母さんの口を塞いだかと思うと、リビングの隣にある大きな寝室に二人が入ってしまった。部屋の中で何かを話し合っているような声はするものの、何を話しているのかわからなかった。父さんとの間に何かあるのかも知れない。そもそも私にも自分だけが抱えている大事な秘密があった。この秘密を隠し続けたまま新しい家族としてうまくやっていけるのかよくわからなかった。せめて母さんにだけでも伝えようかと思いつつ浅田さんが、浅田さんが新しいお父さんになるのだとしたら、浅田さんにも知らせないといけないはずだ。

村瀬彩音は三年前までは村瀬克彦だった。克彦として浅田さんに初めて会った時のことを今でもよく覚えている。いつものように家族四人で店のカウンター席に座ると、その日はご主人が病気で倒れていて、新しく入ったという新人職人さんに握ってもらったのだが、それが浅田さんだった。浅田さんはそこから父とすぐに仲良くなり、父が冗談混じりで俺が死んだら香織はお前に任せてやっていいと言っただけだった。親友のご主人と一緒にプライベートでも付き合っていたので、父さんと浅田さんはまるで兄弟のようだった。

父が亡くなった時にも、ご主人と浅田さんは二人で男泣きに泣いていた。震災の直後ですぐに葬儀を行うことができなかったから、避難所に遺体が運び込まれて来た時に一緒に身元確認を行ったくらいだった。父と僕の遺体確認の際にはもちろん母さんと妹の彩音もしっかりと確認したものの、この二人も死という現実を目の前にして心の中にはち切れんばかりの思いが込み上がった。来たらしかった。その時はこの二人の方がたくさん涙を流していたのだ。

そんなことを思いながら、タブレットに映し出された写真アルバムを遡りながら見ていた。浅田さんと母さんの写真が中心ではあるものの、時には家族写真であったり、集合写真であったり、色々な写真を見ることができた。そして、浅田さんと母さんに加えて父さんが一緒に写っている写真が出て来たのだ。撮影日が震災の直前となっているから、父の生前最後の写真と言ってもいいくらい貴重な写真だった。この頃は母さんと浅田さんが付き合っているのではなく、父さん母さんと一緒に浅田さんが行動

していた時の写真なんだろう。この写真と次の写真には一年以上もの時間が過ぎており、それは母さんと浅田さんのツーショットになっているので、この間に震災が発生して父さんが亡くなり、それからしばらくして二人が付き合い始めたんだと思う。寝室から母さんが出て来ると、写真を眺めていたタブレットを手に取り、また何か別のアプリを立ち上げ、とある画面を見せてくれた。

「あの人が使っていたメールアドレスを覚えてるかしら？」

画面の左上にメールアドレスが表示されていたが、そのメールアドレスは紛れもなく父さんがよく使っていたものだった。父さんの部屋や荷物は片付けたことがあったが、メールアドレスは等のデジタルデータがどうなったかは私は知ることがなかった。母さんが一人で整理したのだろうか？ それとも浅田さんに助けてもらったのだろうか？ 私の中に色々疑問がわいて来た。

「お母さん、このメールを見るにはパスワードを知っている必要があるよね。お父さんがどこかにメモしていたわけじゃ無いよね。どうやってパスワードがわかったの？」

パスワードを知らなければメールを開くことはできないはずだ。それをどうやって母さんが知ったのか、それがとても気になったのだ。

「父さんは万一自分に何かあった時の為に自分が使っているネットサービスのパスワードを浅田さんに教えていたのよ。二人はとても強い友情関係で結ばれていたのよね。父さんが亡くなって、しばらくしてからあの人からメールが届いたの。それは浅田さんが送ったものだったのよ。父さんが亡くなった時に伝えられた通りに母さんに送ってくれたのよ。それで私は浅田さんに直接会いに行つて、それから時々会つては父さんのことを話し合うようになったの。そのうち、それが自然とお互いを恋人として意識するようになって、周りには気づかれないようにこっそりとデートを始めたつてわけ」

「そして、そうやって付き合っているうちに結婚することになったのね。自然と二人が結ばれたなんて、なんだか素敵だよね。浅田さんにとっては父さんが亡くなったことが人生の転機になったんだ」

「まあ、客観的に見ればそうなるんだけど……。彩音ちゃん、落ち着いて聞いてくれる？」

手に持っていたタブレットをローテーブルの上に置き、母さんはソファにゆっくりと私の隣に座った。

「さっき、父さんから力をもらつたつて私は言つたけど、今まで彩音ちゃんとしつかりと向き合う時間が持たなくてごめんさだね。確かにこの三年間は仕事に夢中で、その上浅田さんのお付き合いもあつたから、あなたと一緒に過ごす時間が本当に少なかったと思うわ。母さんはあなたに対してできる限りのことはやって来たと思うけど、あの人亡くなって一人で子育てするのに自信がなくて逃げてたんだと思つわ」

「母さん。そんなこと無いよ。私は母さんがいないことで一人で何でもできるようになったのよ。勉強するために必要なものも生活に必要なものも全部母さんが稼いでくれたから得られたんじゃない」

「それはそれで確かなことよね、彩音ちゃん」

そう言つと、母さんは私の目に向けていた視線を天井の方に移した。

「彩音ちゃん。。。いいえ、克彦だよ。母さんは知っていたのよ。震災が起こつた後に彩音ちゃんとして克彦が生きているんだつて気づいていたの。生まれてからずっと育てて来たんだからね。私の前ではできるだけ彩音として振舞つていても分かるのよ。見た目は彩音に見えてもやっぱり克彦だった。でも、頑張つて彩音ちゃんの人生を引き継ごうとしていたから、今までずっと黙つて見守つていたの。今のあなたはどこからどう見ても彩音ちゃんにしか見えないわよ。もし彩音が生きていたとしたら違つた彩音ちゃんがここにいたんだらうけど。とにかく、母さんは知っていたのよ」

私の目から大粒の涙が流れて来た。周りには彩音として気づかれないように完璧に過ごしていたように思っていたのに、実は母さんにはばれていたなんて、それを知つていながら今までずっと知らないふりをして来たというのだ。それによつて今の彩音がいると言つたわけだった。

「実はね。浅田さんもこのことを知っているの。結婚を考えているんだつたらしつかりと知つていて欲しい事実が幾つあつたけど、その一つとして彼はしつかりと理解してくれたわ」

そう母さんが話すと浅田さんがリビングへとやつて話を付け足した。

「彩音ちゃんの秘密は付き合い始めた頃は知らなかつたんだが、本格的に結婚を考え始めた頃に彩音ちゃんのお母さんが話してくれたんだ。震災の後、彩音ちゃんの様子がおかしいつて、まるで克彦くんみたいだつて言われてね。僕も信じられないのかわからなかつたけど、彩音ちゃんを育てて来たから分かるんだつて言ってくれたんだよ。克彦くんのことだから、本当のことがわからないように彩音ちゃんのように振舞おうとしているんだつてね。僕がプロポーズをした時のデートでも、今の彩音ちゃんは彩音ちゃん以上に彩音ちゃんらしいつて言つてたよ」

私はいつの間にか浅田さんの胸の中に飛び込んで泣いていた。何も言えずにただただ泣き続けた。

\*

桜の花びらが彩りを増している並木道を歩いていた。真新しい茶色いチェック柄のブレザーとプリーツスカート、足元は紺のハイソックスと黒のローファーというスタイルで女子高校生としての新しい生活がこれから始まるのだ。寮と校舎を結ぶ通路がこの桜並木となっていて、暖かく爽やかな風に混ざって桜の花びらが舞う様子は本当に春がやって来たことを感じる事ができた。

校舎に入ると下駄箱の中から自分の名前を探し始めた。学年毎、クラス毎に分かれている下駄箱の中から自分のクラスの下駄箱を見つけると、後ろの方から「村瀬」という名前をさがしてみたが、やっぱり無かった。一番最初に「浅田」というネームプレートが貼り付けられているのを見つけた。そう、今日からはここが私の下駄箱なのだ。

私の下駄箱の隣は「川崎」の文字が貼り付けられていた。親友だった沙織とは同じクラスになったのだ。寮のルームメイトでもありクラスメイトになったのはもしかして学校側の配慮かとも思ってしまう。そう、これから全く新しい生活が始まるのだ。ローファーを脱ぎ鞆の中から上履きを取り出し履き替えていると、沙織がやって来た。

「今日から浅田だよ。なんか新鮮な感じがするけど、私はもう慣れたよ。私たちクラスも一緒だったんだね。これから三年間一緒に過ごす時間が長くなるけど、ますます仲良くしようね」

「サオ、ありがとう。私のことをしっかりとサポートとしてちょうだいね。高校から東京で生活するなんて思ってもいなかったから」

「そうだね。アヤがいたから私はここに入れたんだよ。私ってアヤみたく頭良く無かったじゃない。私の方こそ、これから助けてもらうことがいっぱいだって」

沙織は靴を履き替えるときさっさと教室に向かったが、私は廊下をゆっくりと歩くことにした。それはまるで新しい生活を始める校舎に挨拶をするような感じだ。

同じ制服に身を包んだ沙織の笑顔を見ると、なんだか私はホッとしていた。私が彩音であるのはなんといつても沙織のおかげなのだ。沙織が女の子としての、彩音としての色々なことを教えてくれたから、こーやって彩音らしく振る舞えるようになったのだ。

私は廊下にある大きな鏡の前で立ち止まると、自分の姿をじっと見つめてみた。どこからどう見ても浅田彩音は浅田彩音だ。中学校の時から全くと言っていいほどに成長したと思う。そんな風に自分の顔をじっと見つめていると『お兄ちゃん、後は任せたわね』と言う声が心の中から聞こえて来た。そして、『これからは過去も現在も未来も彩音として生きていってね』と言う声がした。

私は今も過去もこれからも彩音として生きていくのだ。自分が克彦だったと言っ記憶をこれからは捨てて、私のお兄ちゃんの思い出に変えていこうと決心した。私は本当の意味で生まれ変わったのだ。こーやって彩音として生きていることに感謝しよう。

私が決意するとともに『お兄ちゃん、ありがとう』と言う声が聞こえた。

「お兄ちゃん、ありがとう！」

私の甲高い声が廊下に響き渡るのに合わせて桜が微笑むかのように揺れ動いていた。

\*

全寮制の学校生活にすっかり慣れた六月最初の週末、私と沙織は一緒に荷造りをしていた。

母さんと浅田さんとの結婚式が開かれるために一緒に出席するためだった。初めは何もかもが新鮮な東京での生活、二人とも当然のことながら洋服が増えていた。結婚式のために母さんが多めに仕送りを送ってくれたので、二人で原宿へ行っパーティードレスを買って来た。もちろんそれに似合うようにお揃いの靴も新調したのだ。

週末だけの里帰りのくせになぜか荷造りしてみると、あれもこれもと詰め込んでスーツケースがすぐにいっぱいになってしまった。母さんの娘である私が結婚式に行くのは当然だったが、沙織も一緒に行くのはわけがあった。母さんから受付の手伝いをして欲しいと依頼されて交通費も面倒を見てもらえることになったのだ。もちろんこれは沙織と一緒に行きかけた私にとっても嬉しいことだった。

すでに入籍は済ませているものの、浅田さんが初婚ということもあって、結婚式の準備は着々と進められていた。ジュニアブランドに間に合うようにと母さんが手配し出すと、持ち前の交渉力も役に立って短期間で準備ができるようになったのだ。式場となる会場も浅田さんの勤めている寿司屋さんのご主人たちが通う教会で式を挙げるようになって、本当にトントン拍子で事は決まっていたらしい。

私と沙織は新幹線の中で移動しながらとにかくよく喋っていた。普段から同じ部屋に住んでクラスでもプライベートでも一緒にくせになぜだか話は尽きなかった。これなら新幹線での移動じゃなくても良かったかも知れない、普通列車で移動したとしても

時間が経つのはあつという間だろう、実家に一番近い駅に新幹線が到着すると、重たいスーツケースを押しながら改札をくぐり抜けて駅の外へと出た。思ったよりも暖かい空気に包まれるが、明らかに東京の空気よりもきれいだった。

「彩音ちゃん！」

自分の名前を呼びかけられた方向を見るや、そこには浅田さんが見たことのない車の横に立っていた。私が沙織と一緒に浅田さんのところまで歩いて近づくと車の扉が開きお母さんが出て来た。長いスリットの入った黒のスカートから長い脚がチラリと見えたとかと思うや、浅田さんの胸の中に吸い込まれていった。

「お母さん！」

私は思わず呼びかけていた。三ヶ月もしないのにお母さんの姿を久しぶりに見ただけでも、帰って来て良かったと思ったのだ。

「彩音ちゃん。沙織ちゃんとどうやら仲良くやっているようね。それにしても、ますます女の子らしくなっちゃわね。母さんがいない生活はどうかしら？」

電話やメッセージを使ってやりとしているものの、やっぱりこうやっね直接話しをすることが本当に嬉しかった。さらには明日は二人の結婚式が挙げられるのだ。私もそこに娘の彩音として出席するのだ。親戚たちも大勢集まって来ることだろうが、今の私としてしっかりと対応できる自信が漲っていた。

「沙織ちゃん、彩音がお世話になっていきます。沙織ちゃんのご両親は迎えに来るのかしら？」

お母さん一緒にいる沙織に話かけていた。

「私の両親は今日は二人とも仕事で忙しいって言われて一人で帰って来てねって言われました」

「そうなの？じゃあ送っていくわよ。後ろの席に二人とも座ってね」

結局、駅からも沙織と一緒に移動することになり、スーツケースを車のトランクに詰め込むと、お母さんの運転で沙織の家まで向かうことになった。ここでも一緒にいると話しが止まらない私たち、助手席に座っている浅田さんを巻き込んで結婚についていっぱい質問を投げ交わしていた。

沙織の家の前で沙織を降ろした途端に車内は一気に静かになった。私は手提げ鞆の中からスマホを取り出すと沙織にメッセージを送っていた。久しぶりに実家に戻って自分の部屋に入ってみると、なんだか中学校時代にタイムスリップしたかのようだと送ってきた。明日の準備をするからしばらく返事を返せないと言ったので、私はスマホを鞆に入れていた。

沙織の家からしばらく行ったところで車はマンシヨンの駐車場へと入って行った。元々は浅田さんが一人暮らしをしていたマンシヨンだったのが、今では二人の新居となっている。母さんと一緒に住んでいた一軒家は処分してしまったのが、私が帰ってくることを想定してここにも私の部屋を用意してくれていた。

以前よりも一回り大きくなった部屋の中には、中学校生活でお世話になったもので溢れていた。彩音として慣れるための時期ともなった三年間の思い出が詰まったものが、ここには整然と並べられていたのだ。聞くところによると母さんと浅田さんが一緒に置いてくれたらしい。そして、ここにはお兄ちゃんであった村瀬克彦の遺品も残されていた。

元々は自分のことだったが、高校に入学してからの数ヶ月はすっかり彩音として身も心も染まって来たため、お兄ちゃんのお物だと思えるようになっていた。ほんの少しだけとは言っても、自分で使っていた物が以外と残されていた。母さんが私のことを思っているだけ残してくれたのだろう。

スーツケースを部屋に置くとリビングへと出て行った。新しい三人家族としてこの家にやって来るのは初めてのことだった。リビングは浅田さんが一人で住んでいた頃と特に変わりがなかった物の、結婚式のために予め撮影したらしい二人の結婚記念写真がリビングのよく目立つ場所に飾られていた。

「お母さん、とってもキレイよ」

その写真を見るや私はそんな言葉が自然と湧き上がった。タキシードに身を纏った浅田さんのそばに立つ、白のウェディングドレスに包まれた母さんの姿は、まるで女優やモデルかと思間違えるほどだった。

「フフフ、彩音ちゃんったら、ありがとう。その写真って、浅田さんの知り合いの写真家さんに撮ってもらったものなのよ。普段は女優さんやモデルさんを対象にお仕事されている方だから、メイクさんとかも一流の方にやってもらったのよ。私たちは特に何の努力もしていないわよ」

母さんはそう言いながらもとっても嬉しそうだった。浅田さんとの結婚式前日でもとっても疲れているにも関わらず、私と沙織を迎えに来てくれたのだ。あとは二人でゆっくりして欲しいと思ひ、私は自分の部屋へと戻ることにした。

「彩音ちゃん。明日の準備も忘れないで、お休みなさい！」

浅田さんからその声をかけられると部屋に入った。浅田さんも母さんもまだまだ明日の準備をするようでリビングからは二人の話し声が聞こえて来る。ようやく部屋で一人になるとスーツケースの中から明日着る予定のドレスを取り出した。姿見の前で確認してみるのがお兄ちゃん好みの水色のワンピースだ。外側の生地がシースルーとなっているので、一瞬ドキッと誑感してしまうデザインに仕上がっている。

他にも私はアクセサリーケースを取り出したり、明日のために化粧道具も持って来た。中学では母さんからも止められていたものの、高校に入ってからは沙織と一緒に週末は着飾って出かけることもあるのだ。女として磨きをかけるためにも私は沙織からどんどん教えてもらっていた。どんどん女らしくなっていくので沙織が嫉妬するほどだった。

パシャリ！

スマホで明日着るドレスを撮影すると、その写真をすぐさま沙織にメッセージで送った。するとすぐに沙織からも同じ様に沙織が着ようとしているドレスの写真が送られて来た。幼なじみの私たちはまるで姉妹のように見えるので、明日の結婚式では大事なお手伝いが待っていたのだ。私は母さんのウエディングドレス姿に期待しながら眠りについた。

透き通るほどの青空の下、教会で結婚式の準備が進められていた。小さな教会だけに教会員総出で準備をしないでならぬため、結婚式が始まる前からすでに人が集まり始めていた。私と沙織も教会のロビーで準備を進めていた。沙織は私のものとデザインがほぼ同じで色違いのピンクのドレスに身をまとっていた。テーブルと椅子を用意して受付の準備を一緒に進めながら、これからやって来る招待客のことを考えていた。

準備を終えたところで、沙織と一緒に新婦控え室に行くことにした。こうやって大きく育ってから母さんのウエディングドレス姿を見るというのも不思議な感覚になる。たとえ再婚すると言っても、母さんの年齢からすると初婚と言っても今はおかしくない時代でもあるわけで、ちょっと年の離れたお姉さんとして母さんの姿を見るのがとても楽しかった。

新婦控え室は教会の二階にあった。この教会は三階建の構造になっていて、一階にはロビーと食堂に事務室、二階には小グループ用の部屋が幾つか用意されていて、三階には本堂がありこの階だけ天井が高くなっているのだ。外から見ると三角形の屋根に相当するのがこの部分になっているのだ。階段で二階へと上がると新婦控え室は一番奥に用意されていた。

新婦控え室の貼り紙が入口に貼られており扉は固く閉ざされていた。まだ準備中のため関係者以外は立ち入り禁止の様子だが新婦の娘である私はその扉を開けて入った。沙織も私に連れられる感じで一緒に中へと入った。中には新婦のほかにメイク担当とヘア担当、それに着付けを担当する三人の女性も一緒にいた。

真っ白なウエディングドレスに身を纏った母さんの姿を目の当たりにして私は声が出てこないほどだった。これほどキレイな女性が生まれて初めて見るような感覚だったからだ。きっと世の男性が母さんのことを見れば三十代後半と思う人はいないはずだ。それほど母さんの姿は輝いていた。

「彩音ちゃんったら、お母さんのウエディングドレス姿にすっかり見とれてしまったようね」

私が入って来たことに気づいて、呆然としていた私に母さんはそうやって声を掛けてきた。一流のメイクアップアーティストとヘアリストの手によって母さんの美しさは輝きを増していた。私は母さんの背後に寄り添って一緒に鏡を覗いてみることにした。

「こんなにきれいなお母さんの姿って初めて見るよ。お兄ちゃんがこの姿を見たら、きっとものすごく喜ぶと思うよ」

ようやく母さんの前で口を動かすことができた。

「そうよね、母さんには喜ぶ姿が見えているわよ。きっと、あの人もびっくりするに違いないわ」

「そうだね……」

私が落胆しても母さんの表情は曇ることがなかった。浅田さんと結婚するということは大きな決断があるということでもあった。そう言ったすべてのことを受け入れてここにいるんだろう。

「この部屋でほんの少しだけ、娘と二人きりになりたいんですけどいいですか？」

「ううん」

着付けを担当する女性が答えると他の二人も一緒に連れて出て行った。

「あっ、私も下に行くね」

そう言うって沙織が部屋から出て行くと、ここには私と母さんの二人だけが残された。二人きりで母さんが私に何を伝えたいというのことに違いない、そして、母さんの口から出て来ることに私はただ驚くだけだった。母さんは何もかも忘れちゃいけないことをしっかりと分かっていたのだ。

ロビーに戻ると沙織は来客がやって来る残りの準備を続けていた。私も一緒に手伝うのだが、入口に飾られている二人の結婚写真を見るだけで母さんが伝えてくれた話がじわじわと蘇って来る。

「ねえ、彩音ったら大丈夫？ なんだか急に顔色が悪くなったみたいね」

そんな私の様子を察した沙織はそんな風に声をかけてくれた。

「お母さんと二人きりで何を話したの？」

何も無いわけではなかったが、まだ自分の心の中でしっかりと消化できない話を沙織にすることはできなかった。

「沙織、まだ私の中でしっかりと整理できていないことだから、まだはなせないの、本当はこんなによくよしいじゃないんだけどね」

私は少し憔悴状態に陥っていた。

「どんな話をしたのか、私にはわからないけど結婚式の受付嬢として相応しい表情を作ったらいと思っただけど」

沙織にそう言われると、確かにそうだった。私の心の中で整理できない話があるにしても、それをそのまま自分の表情に表すのはこれからの時間を楽しみにしている人たちにとって失礼なことなのだ。

「ここにもう少し一人でいてくれるかな？ 気分変えて来ようと思うから」

私はそう言うって教会の外へと出て行った。

「おっ、彩音ちゃんだよ。もうこんなに立派なお嬢さんになったんだね」

教会の外に出ると親戚の伯父さんに出会った。母さんのお兄さんにあたるが久しぶりに会ったので、すぐには誰だか気づかなかった。

「忘れちゃったのかな？ まあ、しばらく会っていないからそりゃ無理もないか」

伯父さんは母さんが結婚してからずっと海外で生活していたので、幼い頃に出会って以来ほとんど会っていないはずだった。三年前の出来事によって海外から日本に戻って来て生活しているものの、帰って来たときに一度だけ会ったきりだった。

「すっかり大人の女性になったね。俺も結婚していればそろそろ結婚適齢期の娘がいたのかも知れないけど、久しぶりに姪っ子の姿を見られただけでも今日は帰ってしまってもいいかもな」

何を話し始めたかと思えばそんなことだった。伯父さんは今だに独身のままだった。若い頃には色々な女性と付き合ってきたこともあったが、最近は何に付き合っている女性もいないみたいだった。

「伯父さんったら、そんなことを言うって花嫁に失礼よ。二階の控え室に行って挨拶して来たらどうですか？」

「俺一人で行って来るのか？」

「花嫁のお兄ちゃんがそんなこと言うものじゃないわよ。私はもう少しここで外の空気を吸ってから受付に戻るからね。花嫁に挨拶しに行っただけ」

そうやって私は伯父さんの背中を大きく押しつけて教会の中へと押し込めた。その瞬間、私がお兄ちゃんだった頃の記憶がふと思いついた。幼い頃に伯父さんと会った時にも同じようなことがあったのだ。私は教会の前に置かれているちょっとしたベンチの上に腰を落着かせると、その時のことを思い出した。

身も心も浅田彩音としてどんどん定着して行っているもの、お兄ちゃんだった頃の記憶はそのまま覚えていた。今ではそれに加えて彩音としての幼い時の記憶も合わせ持っているの、とっても不思議な感覚だった。普段は元々の自分のことを思い出さずようなことはあまりないものの、新しい人と出会ったからだろうか元々の記憶も自然と蘇って来た。

受付に戻ると沙織が不機嫌そうな表情で待っていた。

「彩音ったら、どこまで行ってたの？招待したお客さんたちはこれから少しずつやって来るみたいよ」  
「玄関の外まで行って来ただけよ」  
「まだ来客が少ないからいいけど、ここにいるのが私一人だっというのはいやっぱり心細いのよ」  
「沙織、御免ね」

彩音は自分が担当する受付席に着く時に沙織にそんなこと言われてしまい、心の中はさらに複雑な気持ちでいっぱいになっていた。母さんかから伝えられた話を思うだけでも、まだまだ整理がついていないからだ。しかし、心の中とは裏腹にできるだけ明るい表情を取り繕っていた。これから来客がどんどんやって来る時間だから結婚式に暗い表情は禁物だった。

「とにかく、これから式が終わって余裕ができるまでは、足を引っ張らないようにするからね。沙織にもそのうち時が来たら話すことができると思うわ。今日は私のお母さんの大切な結婚式、新しいお父さんの浅田さんにとっても大事な日だから」

「彩音とお母さんの間でどんな話があったかわからないけれど、気落ちするようなことを言って御免ね。これから頑張らないとね。教会の席は人でいっぱいになる予定なんだから」

「オッケー！沙織に心配かけた私が悪かったの、これから張り切って出迎えて行こうよ」  
「うん！」

教会のロビーに設置した受付は私たち二人が応対することになっていた。来客が到着したら記帳してもらい、ご祝儀があればそれを受け取るだけだから、浅田さんの一押しでとびつきかわいい彩音と沙織が選ばれたのだ。新郎側の受付には彩音が座り、新婦側には沙織がという具合に二人の役割は分かれていたのだ。

結婚式が始まる一時間前から来客がぞくぞくと押し寄せていた。二人はさっきまでのわだかまりが何事もなかったかのようにとびきりの笑顔でテキパキと受付業務をこなしていた。受付を済ませると挙式が行われる礼拝堂の中に入り、挙式が始まるのを今か今かと待ち望んでいた。

礼拝堂の中、ウェディングドレスを身を包まれたお母さんの姿は目映くほどに綺麗だった。彩音がよく見た結婚アルバムの中で見た若い頃のお母さんよりもずっと輝きを増していたのだ。挙式が始まる頃にはお母さんの姿をいちばん近く見える席に彩音は座っていた。そのためもお母さんの息遣いまで聞こえて来そうな位置にいると、その眩さにより目を細めて眺めることにしていた。この教会の牧師が司式を執り行う中でも、お母さんの美貌を普段の挙式以上に褒め称えるほどだった。司式を行いながらも彩音の頭の中では控室での話がクルクルと回っていたのだ。

控室で二人きりになると、お母さんは自分の目の前にある椅子に座るように彩音を促した。そして、ゆっくりと話し始めた。

「彩音ちゃん」

そう語るとしばらくの間、控室の中には微妙な雰囲気漂っていた。お母さんは控室のそばに誰もいないことを察してから言葉を続けた。

「彩音ちゃん。いや、これからするお話は克彦として聞いてもらえるかしら？」

「お母さん、私はもう彩音として生きるって言ったじゃない」

すっかり忘れかけていたが、お母さんから久しぶりにその名前を聞いて彩音は気分を書してしまった。

「これっきりにするから。今は克彦に対して話したいと思ってるのよ」

お母さんの美しい姿の中から、何か重苦しいというか、荘厳な思いが彩音に伝わって来たので気を取り戻すことにした。

「お母さん、わかったわ。克彦として話すのは今だけにしてよね」

「わかってるわよ。これは彩音としてよりも克彦として伝えておきたいことよ。彩音として聞いてしまうと重荷を載せてしまうような気がするのよね。だから、聞いた話は克彦と一緒に今は無いものとして聞いて欲しいの」

そして、彩音のお母さんは、彩音の中に存在する克彦に向かって話を始めたのだ。

「あれは母さんがあの人と結婚する前のこと、ちょうど付き合っただけのことだったわ。あの頃は神戸に住んでいたことは知っているわよね。あの人は大学入学とともに東北から神戸へとやって来たのだけれども、よほど住み心地が良かったのか就職してからもずっと神戸に住んでたわ。私は幼い頃に神戸に引越して来て短大までずっと神戸で過ごしたのよ」

彩音のお母さんは昔を懐かしんでいた。

「でもね。短大の卒業式が近づいていた一月に神戸にあの大きな地震、阪神淡路大震災が襲って来たの街中が焼け野原のように

なった映像はみたことがあるわよね。あの地震が起きた瞬間に母さんはあの人のことを必死に守りたいって思ったのよ。そうしたら地震の揺れが収まると母さんはあの人の部屋にいたの、東日本大震災の時に克彦と彩音に起こった出来事がその時に起きていたのよ」

「えっ？！それじゃあ、お母さんとお父さんはその時からずっと入れ替わったの？」

「ここから先の話をよく聞いて欲しいんだけど、いいかしら？」

彩音のお母さんはまだ何かを隠しているようだった。彩音はそのまま首を縦に頷くだけだった。

「あの頃は私たちは付き合っている時だったけど、こうなった以上はさっそく結婚してしまうしか無いって思って、すぐに結婚の準備を進めたのよ。お互いに慣れない状態だったから、結婚写真を見ればわかると思うけど、なんだか浮かない表情だったでしょう。新郎新婦の立場が本来とは逆だと思えば納得いく写真なのよね」

「その両親の血を引いているから、私たちは兄妹にも同じことが起きたってわけだよね。お母さんはこうなることを知っていたんじゃないの？」

お母さんがここまで話したところで、彩音は心のうちにずっと秘めていたことを打ち明け始めていた。

「こうなることなんてわからなかったわ。なかなか元に戻らなかったからお互いの立場や役割も徐々に入れ替わっていったのよ。子ども二人授かって、肉体に合わせて行動するしかなかったし、その方が自然だったもの。克彦が小学校に入学する時にはお互いに何の違和感も無く、それぞれの行動を取れるようになってたから、克彦でさえも両親が結婚する前から入れ替わっているなんてわからなかったわよね」

「ということは私たちが接して来たお母さんとお父さんというのは、本来の立場が逆だったってことだよ。今の私みたいに兄が妹になっているのと同じく、父が母で、母が父だったことよね。じゃあ、私たちの知っているお母さんは元男だったってこと？」

「そうよ。まあ、どうせ幼い二人に話したとしても信じられるわけなかったでしょうし、あんまりにも気にさせすぎるのも嫌だったから、二人がある程度成長するまでは話さないようにしてあの人と決めていたのよ」

「じゃあ、今話してくれるっていうのは、私が十分に成長したってことよね。浅田さんはこののを知ってるの？」

「もちろん話してあるわよ。浅田さんとあの人は年の差が少しあるものの仲が良かったからね。親友の間には隠し事はしないものよね。浅田さんはこれからさらに話すことも全部知ってるのよ」

「全部？他にも何か話があるの？」

「じゃあ、ここから最後まで話しちゃうわ。実はね、目の前に座っている私はあなたたちを生み育てて来た元男のお母さんでは無いのよ。あなたたちからすると元女のお父さんで、三年前の東日本大震災でまた夫婦同士で入れ替わって自分が生まれた時の体に戻ったのよ。女として二十年生きてきてから、その後十六年間は男として過ごしたから最初は戸惑ったけど、すぐに感を取り戻したわ。私として十六年間生きてくれたあの人が私の代わりに亡くなったから、しょんぼりするよりも現実をしっかりと受け止めて前進しようと思ったの、女として十六年のブランクはかなり大きかったけど、今は前よりも女らしいと思うわ」

お母さんが全てを吐き出すと彩音は心にモヤモヤしたものができたようだった。

「それじゃあ、今は私からすればお父さんがお母さんってことになるよね。男の時期が長かったのにとってもきれいだからびっくりしちゃった」

「母さんとしては、この年になって初めて着るウエディングドレスだから、色々と頑張ったのよ。メイクのおかけもあるけど、やっぱり男だった元女が女として復活したのが大きいわ。以前よりも男がどう見てくるのかすぐにわかるから、それに合わせて色々と奮発したの」

「このことも浅田さんは知ってるし、受け入れてくれたんだね」

「あの人のこともそうだけど私が頼れるのは浅田さんしかいなかったのよね。克彦なら彩音として悪戦苦闘して来たから、その思いが少しでもわかるわよね。忘れちゃいけないこともあるけど、これからは母と娘として一緒に生きていくしかないのよ」

今まで知らされていなかった両親の過去の出来事、それを一気に受け取った彩音にとっては内心複雑な気持ちだった。父親と母親が結婚する前から入れ替わっていて、そのままの姿で結婚して家庭を持ったなんて、普通は信じることのできない話だが、自分自身が克彦から彩音として生きている体験をしているために全くもって嘘ではないこともわかった。彩音の表情はなんとも複雑だった。

「ねえ、お母さん。念のため一つだけ質問していいかしら？」

気持ちの整理がつかない彩音はとりあえず、真意を確かめることにしたのだ。

「私が克彦として中学校に入学してすぐの頃なんだけど、あの時に父さんと二人きりで近くの山まで登山しに行ったことがあるじゃない。あの山の頂上に立った時に二人きりになった時に見せた写真があったんだけど、お母さんがその頃にお父さんだったのなら、あの時の写真に何が写っているのか鮮明に覚えているはずだよ」

「克彦が中学校に入学した頃って、確か今から六年前のことよね。あの山に登りながら色々話したことは覚えてるわよ。入学早々、克彦が好きなお子が出来たって話してくれて、このあたりでは見かけない新しく引っ越して来た子だったから、声をかけたら言いつつアドバイスしたこともあったよね。母さんには内緒にするって約束で見せてくれた写真のことは、もちろん覚えてい



るわよ。事細かなことまでは他人に言葉で説明するのは難しいけど、私はあの時、克彦の父親として写真を見たんだけど衝撃的な物だったわ」

「あの時、好きな子について母さんには何も話さなかったけれど、それくらいのことならお互いに話を交換すればわかることだよ。写真の中に何があったのかで話しかけてみるよ」

ウエディングドレスに身を包みメイクアップもすでに終わった母さんは目を細めながら何かを思い出しているようだった。

「写真はカラー写真ではなく白黒写真だったわよね。色あせたわけではなく、克彦が白黒フィルムを使って撮った物で写真部の部屋にある現像室で自分で現像したものだったでしょ。その中には四人の人物が一緒に写っていたわよね。左から順番に克彦と小学校からの親友だった石川くん、中学に入學して克彦と同じクラスですぐ前の席に座っていた村上さん、そして、一番右に立っていたのが克彦が密かに恋していた桜井さんだったわよね」

母さんはまるで目の前に写真があるかのように、写っていた一人一人の人物の名前が口から出て来た。

「写っていた人物については正解だけど、この四人の共通点についてはわかっている？」

「もちろん、わかっているわよ。あの時わたしは克彦の父さんだったけど、学校まで車で送り迎えとかよくやっていたじゃない、四人が写真部に入っているのも仲がいい新入生部員だって言っていたわよね。その写真を撮影してくれたのは写真部の先輩で、全国の写真コンクールで入賞したんだよ。この写真部では新入生歓迎会の時に、新入生だけで写真を撮るんだけど、本来この写真は門外不出で外部の人に見せるのは禁止してらんだって山に登りながら話してくれたよね」

「もうこれ以上話してくれなくてもいいよ」

彩奈は目の前にいる母さんが、かつては父さんだったということを受け入れるしかなかった。そもそも自分もかつては克彦だったのだ。自分に起きていることと同じことが父さんと母さんの間に起こっているのも不思議ではなかったからだ。

「克彦。あの頃はわたしが父さんだったって、わかってくれたのね。でも、続きもあなたに打ち明けておかないと、母さんはパーズンロードを歩けないわよ」

彩奈は左腕の首に目をやり時間を気にし始めていた。

「母さんはパーズンではないけど……母さんに戻ってパーズンロードを初めて歩くまで時間がなくなってきた。私は受付の仕事で沙織に任せっきりにしてるから、あと三分以内に受付に戻らないといけないよ。続きは手短かにしてくれるかな」

母さんはゆっくりと頷くと、目を細めながら話したいことをまとめているように見えた。

「克彦がその写真を外部に持ち出すことができたのは、この写真を撮った先輩のおかげだったのよね。本来は克彦が持っているはずのものなのに、先輩からもらった写真の中にこの一枚が混ざっていたのよね。その写真は山に登った時、入学式の写真を父さんだったわたしと一緒に見せてくれたんだけど、その時に混入していた写真が現れたんだわ。写真部の部屋から持ち出したわけでは無かったのだから、克彦に罪に問われなかったけど、先輩は反省しきりだったのよね。その写真を外部の人に見たのは克彦の父親だったわたししかいなかったって、秘密にしようと言われていたからわたしはその時、夫婦の間でも話さなかったのよ」

「やっぱり、母さんには内緒にしておいてたんだ」

「そりゃ、当たり前じゃない、男女でお互いの制服を交換して撮った写真を見たなんてあの人に言ったら、きっと噂がすぐに広まっちゃうじゃないの。写真の存在を隠すことなんかできなくなるわよ」

「確かに優秀な写真部の変な伝統が、あの後も守られたのは父さん、いや今の母さんが父さんだったおかげなのよね」

「克彦が写真部に入部した時は新入生がこの四人だけで、克彦と桜井さん、石川くんと村上さんの体型が近かったのよ、単純に制服を交換したのよね。入学して間もないから新しい制服とは言っても、洗濯もしないでその場で交換したって言ったわよね。体型差が大きい時は、OBたちが写真部のために寄贈した洗濯済みの制服を使ったり、知り合いから借りたりすることもあったんだけど、克彦の代からは新しい制服に切り替わったこともあり体型も近いんだからと、手荒に歓迎してもらったのよね。その頃は克彦が彩音と入れ替わるなんて思いもしなかったけど、そのために準備されていたのかもね。制服だけでなくカツラも用意されていて、あの制服を彩音が来た時にあの写真の克彦とそっくりだと思って思ったのよ」

「決して女装趣味があったわけでもないし、写真部の伝統にのっとただけ、女子の二人も意外に制服を交換することに対して嫌がなくて即オッケーしてくれたからね。話は尽きないけど、私そろそろ行かないと沙織に迷惑かけちゃうから」

「わかったわ。さっきの話は克彦と父さんの内緒話にするわよ。いいわね、彩音ちゃん」

母さんのその言葉に乗るようにして、彩音は控室から出て行った。

そして、結婚式は滞りなく行われ、会場となった教会の礼拝堂にはたくさんの方々の笑顔と祝福で満ちていた。記念写真の撮影時にはブーケトスが行われ、彩音のお母さんの手から投げられたブーケを浅田さんの妹が受け取り大きな拍手が上がっていた。

そんな高く舞い上げられたブーケを彩音は見つめながら、いつかあのブーケが自分の手に渡される日が来るのだと思うのだ。

た。あの忘れちゃいけない日に克彦として生き続けていたのなら、彩音のウェディングドレス姿を見ることはできなかったが、こうして彩音としての人生を引き継ぐことになったわけで、機会に恵まれれば彩音としてウェディングドレスを着ることになるだろう。

中学の頃は彩音としての人生を試行錯誤しながら引き継いで過ごしていたものの、東京の全寮制の女子高に通い始めてからは、克彦でもなく、そして、実の妹として生きていた村瀬彩音でも無い『浅田彩音』としての新しい人生に集中するようになったのだ。過去のことはずっかり洗い流されてしまったから、あとは目の前にのしかかってくる日々以最善を尽くさなくてはならないのだ。

母の結婚式を通じて、浅田彩音は村瀬克彦と村瀬彩音という過去の自分に決別しようと思っただけで、きつとそれは母である浅田香織にとっても同じことだろう、自分の過去がどうであれ今、目の前にあることの方が大切なのだ。いつまでも過去に縛られて捕らえられてしまう生き方とは見切りをつけよう。これからは大震災で被災に遭い残された母娘として、この場所で新しい人生を切り開いていこうと思ったのだ。

#### 【作者からのひとこと(二〇一四年)】

あれから三年の月日が過ぎ去りました。前編・後編と分けての作品となりましたが、しばらく時間を頂いて完全版を準備する予定でおります。三年という時間の長さを作品の中に散りばめてみましたが、まだまだ不自由な感じもします。この三年間という時間もそれ以前のものとは全く別の概念に変わったのではないかと思います。被災された方々の事を思うたびにお祈りしています。そして、これから本当の意味で日本が回復していきますように。

#### 【作者からのひとこと(完全版・二〇一五年)】

東日本大震災から四年、阪神淡路大震災からは二十年が過ぎました。完全版を準備しているうちにこの二つの大震災が接点となり、さらに阪神淡路大震災は節目の年になることもあって、日本という国には忘れちゃいけないことがたくさんあると感じました。完全版としてその後のお話を付け加えたのですが、震災発生から時間が経てば経つほど風化してしまうものですが、忘れないうちにこのことを引き継いで教えていく必要があると思っています。

大震災で被災された方々のために、本当の意味での復興が行われること、そして、閉じられている目が開かれるようにとお祈りしております。日本が本当の意味で回復することを願っております。

二〇一五年二月十一日 夏目彩香

#### 【本作品の著作権等について】

- ・本作品はフィクションであり、登場人物・団体名等はすべて架空のものです。
- ・本作品についてのあらゆる著作権は、全て作者の夏目彩香が有するものとします。
- ・本作品を無断で転載、公開することはご遠慮願います。

copyright 2014-2015 Ayaka NATSUME